

CATCH the NEW!

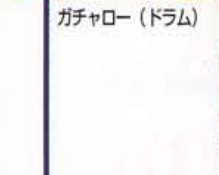
MUSIC

ノイズファクトリー インタビュー

破天荒！京都のロック史上最高にして最低のメタドルバンド！
ノイズファクトリーが理不尽にもメジャーデビュー!?



フランキー永井 (ギター)



ガチャロー (ドラム)



アキレスKEN (パーカッション)



タクコ片山 (キーボード)



一番星哲也 (ベース)



ボンバーヒロ (踊り子)



ロッキー生田・F (リード・ボーカル)

前代未聞の超B級ロックバンドが本意にも1200年もの歴史を誇るこの京都に出現してしまっただけで、奇想天外なテイリング、支離滅裂なメッセーシングを武器に、全国の若者男女に向けてメタドルを全不可解なサウンドを強制する彼らこそ、知る人ぞ知るノイズファクトリーなのである。その彼らがわかばプロ化、メジャーデビューするという噂を聞きつけた本誌下世話レポーター班はその真意を探るべく緊急独占面撃インタビューを敢行した。

「プロになるって本気？」
ロッキー生田・F / リードヴォーカル (以下R) 「エエ、今となっては真剣白刃取りです。メンバー全員、冗談半分で始めたバンドだったんでこんなになるなんて夢にも思ってませんでしたけど、いやア、今回は京都の人たちにはホンマ色々とお世話になりました。あ、そうそう、タイムストップズのお二人にはスペシャル・サンクスのクレジットもんで感謝してます」

「不思議なきっかけですよ、僕がまたまNHKのBSヤングバトルにエントリーしてみたいって声かたんがとんとん拍子で全国大会まで行っちゃって、確か全国優秀賞(第3位)だった、うちの相方のドドンバが今のキューンの橋渡しをしたんだよね」

一番星哲也 / リーダー兼ベース (以下I・T) 「い、いや一期一会が我々のモットーです、皆さんありがとございませしたア」

「じゃ、ここでノイズファクトリーの今までの経歴を少し紹介してもらいましょうか」

I・T 「ちょっと今日、緊張しててあんまりうまく思い出して喋れるかどうか判りませんが、じゃそのあたりはロッキーよろしく」

R 「おい、そんなふり方あるかいな、しゃあないやっちゃな。…ちょうど4年前「ビッグバン」っていうライブハウスの方から「サイケデリックナイト」っていうイベント出てみないって言われて、即席のメンバーで出場したらこれが結構好評でして、テーマとはまったく縁のないイロモノでしたけど(笑)でこれがきっかけで、ここでもイベントにチョコチョコ顔出させてもらうようになったんです。その頃、幸いにも何故かロック系TV番組がいくつか放送されてまして、洒落で朝日放送の「ライブキング」という番組に出演したらこれが病付になっちゃって聞てたレの「餃子大王」のバンド紹介、毎日放送の「アコバ」と破竹の勢いでした(笑)。パブリシティ効果十分というやつですか。色んな小屋から声がかかってきまして、京都の「磔々」で4回連続200名以上の動員という記録を樹立したんです」

I・T 「チケットは全部、メンバーの地



道を手売りしてたけど……」

R 「今晩ワ、古時任三郎です」

I・T 「誰やねんそれ！」

R 「実は……折よくこの頃アホのリーダーの一番星哲也が、KBSラジオのラジオオカーにAD(アシスタント・ディレクター)として乗り込んでまして、ロッキーにも彼のキャラが担当者の目に留って、番組の企画が舞い込んできたんです」

I 「快感！ノイズファクトリー」ですネ

I・T 「苦節2年と3ヶ月、売れる為なら辱かしめも厭いませんでした……」

R 「おい、おまえまさか担当者どー」

I チョ：チョット取材中なんですから、抑えて抑えて！

R 「(少し落ち着きを取り戻して)「94年9月まで一年半も続いた人気番組でした。で、この辺りまではとにかくメンバー全員が楽しくやれば良いと楽観的に思ってたんですが、BSヤングバトルの功績やプロの誘いとかが、マスローの欲求を刺激したんでしょうね、きつと」

I・T 「君なかなか博学やな」

R 「エッヘン(？)ところがこの後突然、暗黒なムードが立ち籠も……しかしその欲求とは裏腹にメンバーの平均年齢が24歳位になったこともあり、皆が柄にもなく人生について考え込む時期でもありました」

I・T 「緊急ミーティングを開きまして」

R 「その重苦しい空気の席上で、沈黙を破ったのが踊り子のボンバーヒロでした。「俺、会社やめるワ」の一言……皆の進路がハッキリしたことは言うまでもありません」

I 「能天気とはかり思ってたのに意外な一面ですね。で、プロとしての今後の方向性は？」

R 「ヘヴィメタルでありながらどこどなくアィドル的な音楽っていうんですか、アィドル的な曲をヘヴィメタルにアレンジするっていうんですか、とにかくハードでかつキャッチーな音創りを心掛けたと思います」

I・T 「アィドルメタルメタドルという新スタイルを確立するつもりです。メンバー全員の洗練されたマスクやスタイルにも恵まれてますしネ(一同沈黙)」

I 「アーティストがいつもよく理解できないんですけど」

R 「お茶の間の皆さんですよ。日常生活に密着した誰もが共感を覚えるものを題材にして、我々の歌は作られますから(笑)。それをロックという土台に乗せて、歌謡曲やポップス、レゲエや演歌といったソースに絡ませる訳です。いわばバラエティメタルアィドル路線IIパラメタルです。歌としては、パーカッションのアキレ

SKENがそのモデルとなったといわれる、ホモに目覚めた一人の男を描いた「ホテル・パワー」を聴いてもらえばよく理解ります(ホンマかいなと同)」

I 「まずまずエスカレートする飛び道具、パロディネタと、ステイジングもこの先気になるところですが」

R 「基本はヘヴィメタに代表されるヘッドバッキングのしんどさアィドルの振付でショーアップすることですが、個々のキャラを最大限に引き出すことには日夜弛まぬ努力を行なってます。ガチャローのドラムソロ、フランキー永井のギターテクと正統派な一面も披露しつつ、キーボードのタクコ片山(一番雲のない男)のポリネシアン・マッスルショーなどハブニング性に富んだ展開を仕組んだり。キャラは7人がバラバラだけど、一人一人の存在感はずいぶんあってそれでいて纏まっている」

I・T 「いかりや長介率いるドリフがパィブルです」

I 「今一番の目標は？」

R 「ヘヴィメタ版米々クラブになること」

I 「最後に読者に向かって一言」

R 「メンバー始どが京都出身なんで、地元を大切にしたいと思ってます。12月20、21、22日と京都ミュージズでやる3DAY Sはアマチュア最後のライブとあって飛び切りの内容です。来て頂ければ家庭円満、無病息災間違いなし」

I・T 「ライブ中アホー言うのやめて下さい」

I 「ありがとうございます。今夜のスター1千一夜のゲストはノイズファクトリーの皆さんでした！」

- 取材・文/ゴソジ・モックン・カスロー
- 撮影/クマゴロー内藤
- 協力/キューン・ソニールコード
- 京都MUSEホール
- アルバム「Noise Factory」
- 1月21日リリース/税込2,800円/キューン・ソニールコード
- シングル「ホテル・パワー」絶賛発売中/税込1,000円

テイ・トウワ インタビュー

パブ・ボサからテクノヴァまで、
ポップなだけにハマる構想30年ソロ。



「フューチャー・リスニング！」
CD 2,800円（税込）／LP 3,000円（税込）
フォーライフ

かつて坂本龍一氏のFM番組「サウンド・ストリート」デモ・テープ特集でその才能を認められたテイ・トウワ。後NYに渡りディレイライトの第3のメンバーとなり、それ以外にもプロデューサー、リミキサーとして数々の作品を手掛ける彼が、坂本氏のレーベル、グレートから初ソロ「フューチャー・リスニング」を発表。その披露も兼ねたDJイベントを京都で行なった彼をキャッチ（この夜は坂本氏と共演が実現。これはNYでのゲイシャ・ガールズのステージ以来ゆえ自撃した人は超幸運）。

日本のミュージシャンのリミックスやプロデュースの場合作業はどのようですか？

「大体リミックス系は向こうでやります。小泉今日子さんとピチカートとかは全然日本に來なくてテープだけでやって。ただ今年にはノック（人魚）とかゲイシャ・ガールズの曲を作ったリプロデュースしたりしましたから結構日本に來ましたね」

CDの帯にもあるようにこのソロは構想30年だそうですが、ソロを出

すことは前から考えていたんですか？
「いや、そういう感じでもなくて。ディレイライトの2枚目が終わった後、ちょっとお休みを取ろうと思って。と言って音楽辞めてるわけじゃないから、暇さえあればやってたんですけど、そのストックの中の機つかを完成形に持ってくるかな、と。ディレイライトの方はお休みしてたもんだから、僕はほとんど関係せず3rdが一枚出来て、それはそれでいいんじゃないって感じで、この何曲かをどうしようかなって思った時にやっぱりソロかな、と。坂本龍一さんがレーベルやるんだだけって言われて。お休みもちょっと飽きたしってことで」

ソロに対して最初からすごく積極的というわけではなかったんですね。

「そうですね。でも元々ソロなんですけどね（笑）。ディレイライトもソロの集まりみたいなもんだし。僕もディレイライトやる前にもジャンブル（ジャングル・ブラザース）とかクエスト（A.T.C.）とかやってたし。でもディレイライトが、デビュー以降助走ナシでパインと行っちゃったことあったから、周りがいきなり変わっちゃったのね。マイ・ペースよりもアワ・ペースって感じで皆んなのペースでしか出来なかった。自分はそのから抜けない限りはマイ・ペースになれないなと思って。だから途中ツアーを辞めたりとかしたんですけど。他の2人に限らずミュージシャンでそうだと思うんだけど、自分の作った曲とか演奏した曲っていうのは他人の前で聴かせたい気持ちがあると思うんだけど僕はないのね。僕のやる部分は、ディレイライトがやる部分もそうだけど、演奏したり色んなコンピュータの細かいプログラミングを経て音を重ね合わせたり、そういうプロセスでもう完結しちゃってることだから。それをもう一回ライブで弾くとかに全然興味がないのね。練習とか。もちろんライブって一種のドラッグだ

と思うよ、歓声とか。気持ちいいけどね。ライブっていう空間でちやほやされるとか。でもやっぱり僕は他にやりたいことが一杯あるから」

ライブとはまた違いますけど、DJとしてクラブという空間で人前に出たりするのは……

「それは全然OKです。あんまり好きじゃないけど、いずれは人前に出ることからはフェイド・アウトしたいと思ってますよ。DJは続けるかな。覆面したりして（笑）。でも今みたいにレコード・ジャケットに顔が載ってとかそういう形では確実にこの10年以内に消え去りたいと思うんだけど。そんな気がします。後は若い人達をプロデュースしたり。もちろんフォーライフと3枚契約しましたが、とっとと3枚出して、ね（笑）」

ピチカートがアメリカでレコードを出す際（今の米国音楽状況が格好いいとは思えないが、NYに渋谷な、サバービアン風を吹き込むと考えれば海外進出も面白い）てなコメントを小西さんがされてたみたいですが「フューチャー・リスニング」にもそういう東京テイストを感じますが、その辺の意識みたいなのはあったんですか？

「でもディレイライトやってる時、僕が入った頃からそういう要素が入ってると思う。東京的なテイストだと言われたこともあるしね。だけどそういう意識はないんですけどね。ピチカートの方が僕よりもっと東京的ですよ」

そのピチカートの野宮真貴さんが歌う日本語の曲があったり、特に日本や東京を意識してないのに日本人が聴いて嬉しい要素がありますよね。
「あれは東京というよりも東京の外れにあるパブを意識して（笑）。パブ・ボサって呼んでるんだけど。東京23区からは外れたパブ。僕はそういう意味でグローバルにやっていきたいと思ってるから、インターナショナルな

とかと言われるのはあんまり好きじゃないけど、音楽ってそういうものだから。形容詞的には東京っぽいとかNYっぽいとかって必要なんだろうけど、作ってる時には土地の意識はないです。ただ今までは洋楽扱いだったんですけど、日本先行発売ってこともあって日本語が入らないと洋楽になっちゃうらしいんですけど、別に日本人だけじゃないんですけど、一人でも多くのひとに聴いてもらいたいし、そういう意味でちよっとサービシしたかなって。自分にサービシってのもあるけど（笑）。ここ2年間休んで、オフアー来る中で結果としてやった仕事はほとんど邦楽だったんですよ。タイアップ・ソングやったり、それはそれで違う部分の脳味噌使ってますごく面白いなと思って、その辺のフィードバックしたいなと思ったし。僕は小西さんみたいなあいう詞で全曲やったり出来ないうから、あれは僕なりの日本語との関わり方その1ってことでですよ」

今作は坂本さんを始め立花ハジメさん、松武秀樹さん、細野晴臣さん等YMO系の方々が多く参加されてサウンド・ストリート世代にとっては、正直嬉しいですね。

「そういうシンパシー的なものは嬉しいですよ僕としては。じゃあサウンド・ストリート聴いてた奴は皆んな2枚買え、と（笑）」

ところで、テイさんの手元には大量のデモ・テープが届くそうですが「ええ。ちゃんと聴いてますよ。まずは1本につき3秒だけ。それでも本当にいいやつは印象に残るから。だってプロのデモも聴くわけだから、それでも断る方がほとんどだったりするし」

でもちゃんと聴いてるんですね。
「一応デモ・テープ上がりですから、所詮（笑）。デモ・テープの鬼と呼んで下さい」

皆んなが愛と勇気を持って
生きてゆけるように歌ってる。



「タイム」2500円(税込) / BMGピクター

結婚式の定番ナンバーとして君臨する美しきバラードの名曲「オールウェイズ」で知られるアトランティック・スターが、デイビッド、ウエイン、ジョンナンの3人のルイス兄弟に新しい女性シンガー、アイシャ・ターナーが加わった通算10枚目のニューアルバム「タイム」を発表。ホーラ・アプドールを手掛けるエリオット・ウルフ、トニー・ブラクストン、ジェイトらを手掛けるヴァサール・ベンフォード、セリーヌ・ティオンらを手掛けるガイ・ローチらをプロデューサーに迎えた作品だ(もちろんデイビッドとウエイン・ルイス兄弟もセルフ・プロデュースしている)。この新作と新メンバー、アイシャを引っ提げ、大阪ブルーノートで公演を行なった彼ら。アルバムではあまりフィーチャーされなかったのが惜まれるアイシャの迫力のV.O.に、観客は圧倒&感動の連続だった。そんな彼らに、今回はデイビッド、ウエイン、アイシャの3人にインタビ

ュー。
 ー まず美しい新メンバーを紹介して欲しいですね。
 アイシャ「カリフォルニア出身のアイシャ・ターナーです。このバンドがブレイクしては初めての仕事です。でも生まれてきてからずっと歌は歌ってききました」
 デイビッド「華奢な身体に似合わない強い声の持ち主で、大変若々しくてダンサーとしても素晴らしいよ」
 ウエイン「脚線美の持ち主だからストッキングが何かのコーシヤルの話があればデイビッドと一緒に後ろで口笛を吹く役を演じたいもんだな(笑)」
 ー アルバム「タイム」のメイン女性ボーカルは彼女ではないけどなぜ?
 「実は「タイム」はアイシャをメンバーに入れる前にほとんど全部出来上がったんだ。レコード会社を移籍したばかりだったし発売日を延期することも出来なかったんだ。彼女のV.O.は本当に素晴らしいので、もっと早く彼女に出会ってみたいと今も思うよ」
 ー アイシャは「オールウェイズ」のような往年の名曲を初めて歌う時プレッシャーは感じた? 何しろこれまで歴代シンガーが何人もいたでしょう?
 アイシャ「シャワーを浴びる時いつでもどこでも口ずさんでた歌だったからまさか自分がそのメンバーになってライブで歌うなんて思いもしなかった。そうね、実際今でも緊張するわ。でもこの私のスタイルをメンバーは選んでくれたんだから、それなら自分の歌を自分なりにベストな状態で歌えたらいいと思うことでリラックスできたわ」

ー アイシャとウエインやデイビッド達とは年代が違うから、やっぱり普段聴く音楽は違いますか?
 デイビッド「基本的には僕ら全員がすべての音楽のファンなんだ。それこそクラシックやR&Bやすべてね」
 アイシャ「いいものと悪いものを見極めるようになるため、好きでなくても取りあえずどんな音楽でも聴いてるの」
 ウエイン「最近の流行の歌は個人的には好きじゃないんだ。でもラップの中には自分達の曲に取り入れたらいいようなリズムとかプラスになるものもある。また意味のあるメッセージをもったものは好きだけど、大抵のラップはそれを聴いたことよって一日を力強く過ごせるような部分がないよね。とにかく僕らは質の高い音楽が好きで聴いているんだ」
 ー クール&ザ・ギャングは「TVは悪いニュースばかり流すけど、クイ&クイはいいニュースだけだ」と言っていました。つまりアトランティックもそんな存在でいたいということ?
 全員「そう! いつもね」
 デイビッド「僕らのメッセージは愛なんだけど、それは恋人同志や兄弟や世界の中での愛。この地球上には男性と女性しかいないわけだけど、男女間に愛が生まれると、家庭が出来、子供が生まれ、その中からやがてリーダーになる人物が現われてくる。そういう人物が正しい人生観を上手く親にリードしてもらってなければ、世界はどんどん間違った方向に進んでいってしまふ、今の状況みたいだね。だからすべては愛に戻って行くんだ。人間の内面にある悪や自分の中にある狂気を捕われてしまわないよう愛と希望を持って皆んなが生きていけるように、僕らはやってくるんだよね。僕らの家庭自体が熱心なクリスチャンだっ

たから、そういう精神的背景があるかもしれない」
 ー 日本はもちろん、アメリカも宗教的背景が崩壊しつつある印象を受けてましたが、ルイス家はそうではないんですね。
 デイビッド「アメリカでも家庭での宗教教育ってのがなくなってきたよね。僕らの一家では祖母が率先して敬虔なクリスチャンだったんだ」
 ウエイン「歪んだ方向に世の中が進んでるよね。そういう子供が大人になってホワイト・ハウスとかそういうところに入り込んでるから間違った政治になっていくんだ。だから僕らの歌によって少しでも本当はこうなんだよっていう方向に引っ張ってあげられるようにやっているとだけだね」
 デイビッド「昔は親から善悪を教えられたけど、今はもうTVの影響が大きくなってきて。それでラップやヘヴィメタルが受ける悪い影響、悪が格好いいことだという間違った考えを教え込まれて。ただでさえ代々引き継ぐ教えが減っているのに、しまいに何も教える事なんてない親から、何も持たない子供が育ってしまう。そういう現状において、僕らはクリスチャンであるという背景を大切にしたい、今の社会に対して働きかけたいんだ」
 ー デイビッドが以前コメントしていた、アトランティックのサウンド作りにおいてメンバーが兄弟だということとは重要な要素だ、という意味は、家庭の宗教的背景にもいえること?
 デイビッド「とにかくルイス一族はミュージシャンだらけの音楽一族なんだ。そういう環境で生活してきたから今の僕らがいるんだってことだね」
 協力/阪神ブルーノート、BMGピクター

ロバート・アルトマンの描く、人間模様のタペストリー。



きつとこんなふうに
自分たちも毎日を生きているんだと
気づいたときの人生の見つめ方。



上映時間3時間。
主要な登場人物22人。
主なストーリーこれといってなし。

『ザ・プレイヤー』で92年カンヌ映画祭監督賞を得、ハリウッド復帰を果たしたロバート・アルトマンの次なる世界「ショート・カット」を簡単に述べると、以上のようになる。前作の『ザ・プレイヤー』を「ハリウッド・裏事情」とするならば、こちらは「風変わった」覗き見る隣人の物語」とでも呼ぶべきか。アルトマンお得意の、もつれてなんぼの人間関係のこたごたが繰り広げられている。

ロサンゼルス住宅街。そこで生活するごくごく平凡な人間たちを、まるでバラバラになったパズルのピースを拾い集めるように、カメラはひとかけらずつ映し出してゆく。突如起こった息子の交通事故という悲劇に取り乱す、地元テレビキャスターの夫とその妻。その息子を車で轢いた張本人でありながら、事の重大さを知らされないまま、うだつの上からない運転手の夫とくっついてたり離れたりを繰り返す中年ウエイレス。美しい妻を顧みず、浮気相手の女を追いかけ回すプレイボーイの警察官。ジャズ歌手の母親との間にある心の溝を埋めることができずに、ひとり殻に閉じこもる少女。家計のためといながら、夫や子供の目の前でせつせとテレフォンセックスのバイトにいそむ主婦。パースデーケーキを焼いたがキャンセルされ、その腹いせにいたすら電話を繰り返すキーキ職人。妻の不貞疑惑に執拗に固執し、何かとあればその話を持ち出す若き医師。釣りに出掛けた川辺で女性の全裸死体を発見するも、慌てることなくまあいいか、と平然

と釣り糸をたらず3人の男たち…

あなたには彼らが異常に見えるかもしれない。私にもそう見えた。このひとたちってちよっとおかしいんじゃないの?でも考えてみると、彼らは異常でもなんでもないのだった。誰にでも思い当たるだろう。毎日の暮らしの中、我々の心にくっ当たり前のように芽生える感情—不満、葛藤、怒り、嫉妬、妥協、そして嘘。普段は見えない他人の赤裸々な心の内を、アルトマンはただスクリーンの上に再現してみせただけに過ぎない。夫婦は裏切り合い、友人は馴れ合い、他人は欺き合う。そんな意味で敢えて言うなら、多少の笑いを描いたこの作品は、絶望的に暗い。思いっきり、気が滅入る。

ただ忘れてならないのは、これこそ人間絵巻をオハコとするアルトマン独自の手法であるということだ。エゴと本音のカオスにとっぷりと漬かりながらも、つまるところ「ま、人生どうせこんなもんでしょ」とすかししてしまえる、その冷やかな意識のスタンスである。

趣向は異なるが、彼の87年度作品『ニューヨークの青い鳥』にも、どこか似たようなカオスが描かれていた。バイセクシュアルを誇る男と恋人募集広告で知り合う顔面神経痛の女性記者。ふたりの恋に嫉妬の炎を燃やす女嫌いのマザコン・ゲイ青年。患者と寝ることに生き甲斐を感じている、キザで色情狂の精神科医、etc.etc. 『ショート・カット』と違ってデフォルメ過多の、アブノーマルな登場人物たちがくみずほくれつ詰め合う愛憎関係の糸は、今にもぶっつりと切れそうであり切れないどころか一つの輪になり

収まるのだ。ここにも「ごんごの、フツ」と笑える、異常な逞しさが介在している(おまけにアルトマンは、この作品に自らの「M★A★S★H」『ウェディング』、そして「ナッシュビル」までをパロディにして突っ込むという、自虐的悪ノリまでやってのけた。心の中に狂気が潜むのではなく、狂気の中に、無関心という名の平和がはびこっているという状況のパラドックス。つまり、これぞアルトマンいわんとするところの我々の「日常」なのではないか。

『ショート・カット』のラスト、少しづつ関わり合っていた人々のエピソードが、ある出来事で一気に同時進行し結末へとなだれ込む。彼らの毎日が変わるだろうか?答えはノーだろう。だが悲観するには及ばない。生きることに自分が愚かさのアイロニーなら、下手な説教をたれるより「それでも地球は廻ってる」とうそぶけるアルトマン流哲学のほうに、より人生を愛せる秘訣があるように思えるのである。

文/木村紀子

■ショート・カット

レイモンド・カーヴァー原作
ロバート・アルトマン監督

〈出演〉アンディ・マクドウェル、ティム・ロビンズ、マシュー・モディーン、トム・ウェイツ、リリー・トムリン、マデリン・ストー、ロバート・ダウニー・ジュニア、ジュリアン・ムーア、ヒューイ・ルイス 他
1994年度作品/ヘラルド

※12月24日より朝日シネマで公開

近松心中物語～それは恋～

降りしきる雪の中、
男と女の情念が燃え尽きる。

PLAY



登場人物の実年齢に近いキャスト
イングで生まれ変わった！

昨年の「王女メディア」今年の「にこり江」に続く、毎日放送企画の蜷川作品の第三弾は「近松心中物語～それは恋～」。平幹二郎・太地喜和子の共演で、1979年の初演以来「戦後最高の舞台」と絶賛され、数々の賞を受賞、ロンドンやヘルギーでも上演されたこの名作が、来年の3月と4月、9年ぶりに大阪近鉄劇場で甦ることになる。

元禄の人々の生きざまを背景に、遊女梅川と飛脚屋亀屋の忠兵衛、古道具屋傘屋の婿養子与兵衛とその女房お亀という二組の若いカップルが、心中に追い込まれて行く命の哀れを描いたこの作品は、脚本家の秋元松代が、近松門左衛門の浄瑠璃をベースに書き下ろしたオリジナル。

新生「近松」の見どころのひとつは、演じる俳優の年齢がグリーンと若返ったこと。平・太地のコンビに変わり、忠兵衛に坂東八十助、梅川に樋口河南子、また与兵衛に藤村政信、お亀に寺島しのぶと、原作の登場人物の実年齢に近い若手の実

力派が華を競う。大役に挑む八十助(38)は、「大変光栄です。以前満員の観客の一人として、ドキドキしながら熱い感動を覚えた思い出のある作品です。今回は歌舞伎役者という肩書にこだわらず、一俳優として新しい作品に取り組みつもりで、この役を演じていきたいと思っています。」

蜷川氏が以前から恋焦がれて、やっと出演が実現したという樋口(36)は「舞台の経験は10年ほど前に一度だけですけど、演目が近松で、相手役が八十助さんで、演出が蜷川さんと、条件がこれだけ揃ったら、やらない理由がないですよ。これまで映画やTVで体験できなかった何かがあるような気がします。」

CMやバラエティー番組で人気者になった勝村(31)は、劇団第三舞台所属のれっきとした舞台俳優。「昔、蜷川さんのもとで初舞台を体験させていただいた時は、ほんとに何もわからなかったり、舞台上でフンドシの紐がはずれて笑われたり(笑)、ずいぶん情けない思い出もありますけれども、今回はこんな大きな役をいただきましたので、素晴らしい舞台になるように努力したいと思います。」

歌舞伎俳優尾上菊五郎・女優富司純子夫妻のまな娘寺島(21)は、文学座の研修生。今年の夏杉村春子と共演した「恋ぶみ屋一葉」では、その実力が大きく評価された。蜷川作品は今度二度目。「以前は市原悦子さんがおやりにな

った役ですけど、本当は15歳だということですから、新しい自由奔放なお亀を演じていきたいと思っています。」

そのほか、嵐徳三郎・園桂也子・根岸明美らベテランが脇をかためる。キャストイングが若く少ないことについて蜷川氏は、「少しアツブテンボというところでしようか。それに、役者さんたちに方向づけを示さないで、自由にやっていただくということなんです。これだけ様々な分野の俳優さんたちを、近松の舞台という宇宙の中で、果たしてひとつに重ね合わせる事ができるかどうかと、今からワクワクしています。」

舞い散る雪は1トン車で4台分。

蜷川演出の最大の魅力は「目の快楽」にある。仏壇をイメージした舞台美術と満開の桜吹雪の中でクライマックスを迎える「マクベス」、ひな壇で狂気を演じる「ハムレット」……、蜷川氏の魔力にかかると、シエクスピアや近松など伝統の古典劇が、現代の観客をめぐるめくめくような陶酔に引きずりこむ新作に生まれかわる。

「今回の『近松』も、舞い散る雪、乱れ咲く彼岸花と、基本的には今までどおりです。ただ長く続くと、演

劇としては完成されていくのかもしれないけれども様式化されてしまう。僕は、作品の持っている愛・死・金という現代にも通じるテーマを身近なものとして表現したいんですね。それを俳優さん達の新鮮な演技に期待して下さい。」

幕開きの人形遣いと、衣装担当は辻村ジュサブロー。主題歌は森進一。究極の蜷川美学を堪能できそう。

●近松心中物語～それは恋～
日程・1995年3月5日～4月27日
場所・近鉄劇場
時間・昼の部12時 夜の部5時
チケット・S席12000円
A席 6000円
(前売り券発売中)

- 近鉄劇場近松専用前売場
06・773・8400
- チケットぴあ
06・363・9999
- 関西PG協会
06・456・2555
- JCBチケットセンター
06・945・0404
- 近松心中公演事務所
06・946・8400

取材・文/あさかよし



「僕の演出なんかどうでもいいですから、とにかく俳優さんを見て下さい。」
製作発表の席での蜷川幸雄氏はすこぶるご満悦である。あの名作が、久々に大阪の舞台で蘇る。

